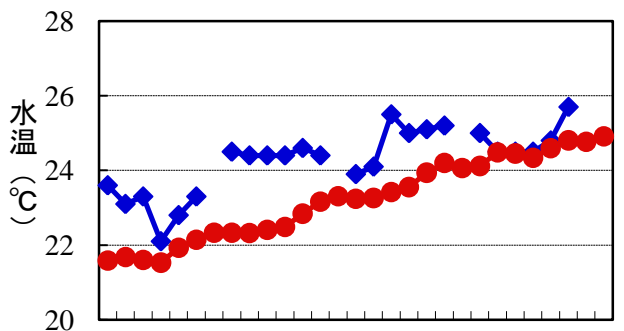




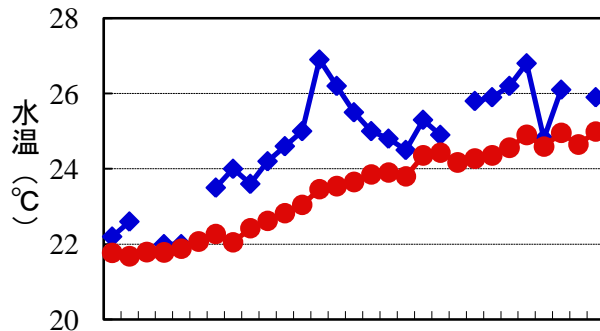
〔 海の状況 (6/21~7/20) 〕

- ・ 神子表面水温・・・期間全体をとおして概ねはなはだ高め（過去30年平均より2.0℃程度高め）で推移し、平年並み（過去30年平均の±0.5℃程度）の日が数日 みられた(図1)。
- ・ 米ノ表面水温・・・期間全体をとおして水温の変動が大きく、平年並み（過去10年平均の±0.5℃程度）からはなはだ高め（過去10年平均より2.0℃程度高め）で推移した(図2)。



◆ 神子(2010) ● 神子平年(過去30年平均)

図1. 若狭町神子地先における表面水温の推移



◆ 米ノ(2010) ● 米ノ平年(過去10年平均)

図2. 越前町米ノ地先における表面水温の推移

- ・ 100m 深水温・・・若狭湾沿岸域には14~15℃台の水域が広がっていた(図3)。

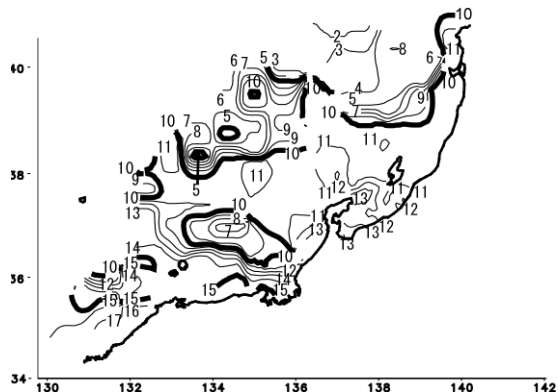


図3. 2010年7月上旬の100m深水温

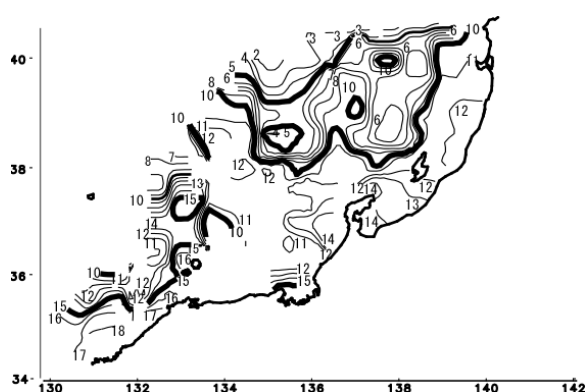


図4. 2009年7月上旬の100m深水温

資料：日本海区水産研究所ホームページ発表の日本海漁場海況速報

平成22年度第2回日本海海況予報

日本海区水産研究所が平成22年7~9月の日本海海況予報を発表しましたので、関係部分を紹介いたします（本予報は、水産庁ホームページ[<http://www.jfa.maff.go.jp/>]の報道発表資料の中に掲載されています。）。

- 山陰・若狭沖の冷水域は、3月は規模はやや小さく接岸状況は平年並み、4、5月はやや大きくやや接岸、6月はやや大きくかなり接岸、今後は張り出しが強くなる見通しです。
- 対馬暖流域の表面水温は、3月は日本海西部（福井県～島根県）の沿岸付近で“やや低め”、5~6月は日本海中部域を中心に日本海の多くの海域で“かなり低め”から“はなはだ低め”、今後は“やや低めで”経過する見通しです。
- 対馬暖流域の50m深水温は、3~6月は日本海西部北部とも“平年並み”、今後も“平年並み”で経過する見通しです。

（鮎川 航太）

〔漁の模様〕

2010年6月の県内の総水揚量は2,026tで、2009年同月を522t上回った。アジ類(2010年; 398t, 2009年; 448t 以下同じ)、トビウオ(67t, 121t)等は下回ったものの、ブリ類(666t, 225t)、スルメイカ(340t, 259t)、ケンサキイカ(31t, 5t)等は上回った。

漁業種別の状況

定置網・・・全体では前年より364t上回った。アジ類(小アジ銘柄主体)、トビウオ等が下回ったが、ブリ類(ツバス銘柄主体)、ケンサキイカ等が上回った。

底びき網・・・アカガレイ等が下回ったが、全体では平年並み(過去10年平均)の漁獲量であった。

釣り・他・・・ブリ類、ヒラメ、スルメイカ等が上回り、全体では前年より157t上回った。

〔県内主要漁業の6月の漁獲量〕

(単位: kg)

定置網			
魚種	2010年	2009年	00-09平均
カタクチイワシ	4,944	12,468	15,338
アジ類	396,661	446,762	451,356
サバ類	78,039	62,421	41,054
マグロ類	9,852	13,933	4,819
カツオ類	233	90	3,427
ブリ類	634,805	223,862	159,527
サワラ	88,153	79,167	48,207
トビウオ	66,896	120,749	178,833
マダイ	21,091	8,932	12,264
クロダイ	1,360	972	1,104
スズキ	9,546	9,748	5,425
ヒラメ	4,099	1,442	1,413
カマス	5,100	12,084	9,070
フグ類	4,335	7,064	18,014
タチウオ	110	46	356
スルメイカ	4,418	3,697	13,167
アオリイカ	863	941	1,501
ケンサキイカ	25,002	3,999	20,678
その他	13,455	7,343	43,941
合計	1,382,348	1,018,215	1,039,564

底びき網のつづき			
魚種	2010年	2009年	00-09平均
その他	5,489	1,242	2,421
合計	47,274	46,621	49,436

釣り、延縄、さし網、その他			
魚種	2010年	2009年	00-09平均
アジ類	1,625	1,434	699
サバ類	141	27	269
ブリ類	31,160	1,488	4,369
トビウオ	424	621	523
マダイ	8,285	4,062	5,017
キダイ	6,131	6,233	3,687
アマダイ	5,460	5,240	6,093
スズキ	8,618	6,153	6,055
ヒラメ	8,138	3,161	3,367
その他カレイ	3,248	4,313	4,708
カマス	284	97	176
タチウオ	63	55	700
アナゴ	2,066	2,599	5,415
メバル類	12,437	4,494	4,572
キス類	142	98	551
スルメイカ	335,422	255,380	245,912
アオリイカ	532	884	1,036
ケンサキイカ	6,159	773	5,778
ソデイカ	3,506	11	111
タコ類	47,624	42,724	41,424
その他エビ	1,330	1,542	1,853
その他	110,665	93,774	105,111
合計	596,222	438,753	450,211

底びき網			
魚種	2010年	2009年	00-09平均
マダイ	1,322	428	1,278
アカガレイ	2,304	5,275	2,067
その他カレイ	1,798	1,538	1,592
アナゴ	32	53	82
ハタハタ	2,458	1,190	1,379
ニギス	30	35	963
タコ類	645	1,045	1,016
アカエビ	30,468	31,669	34,164
その他エビ	1,871	3,796	3,228

総計	2010年	2009年	※00-09平均
	2,025,844	1,503,589	1,578,023

* まき網による漁獲量を含む。

〔近府県の漁模様〕

(5月下旬から6月中旬にかけての漁獲状況……水揚げ1日1隻または1統あたり。京都府の定置網漁獲量は舞鶴漁連への1日あたりの水揚量。)

石川県・・・定置網・・・マアジ279kg、ブリ44kg、フクラギ11kg、サワラ25kg、トビウオ49kg。

京都府・・・定置網・・・マアジ19t、サバ類1.4t、ツバス1.1t、カタクチイワシ967kg。

兵庫県・・・定置網・・・マアジ2.1t、サバ類87kg、ツバス11kg、トビウオ9kg。

鳥取県・・・まき網・・・マアジ16.9t、カタクチイワシ759kg、ブリ類377kg。

(鮎川 航太)

安心・安全な「若狭フグ」の養殖技術を開発しています！ ～ハダムシの防除方法～

春、若狭湾の養殖場には小さくて可愛らしいトラフグの種苗が一斉に入荷します。トラフグたちが生簀の環境にも慣れ、歯切りも終わってやれやれとやっと一息……といきたい所ですが、その頃から養殖業者の方たちと寄生虫との戦いが始まります。夏から秋にかけてはエラムシ（ヘテロボツリウム）やハダムシ（ネオベネデニア）、冬から春にかけてはスクーチカやトリコジナ、ギロダクチス等、トラフグは周年寄生虫の脅威にさらされており、養殖業者の方々は気の休まる時がありません。

しかし、寄生虫症がトラフグの病気のメインということは、まずは健康管理、そして早めの対策を心掛ければ、病気を未然に防ぐことができると考えられます。

そこで、水産試験場では血液性状検査による健康診断を実施し、フグの健康管理が出来ないか、また梅等の食材をフグに食べさせることで寄生虫を予防出来ないか等、安心・安全な「若狭フグ」の養殖技術を開発しています。

その結果、青梅ジュースを添加した配合飼料を1カ月間与えたトラフグでは、ハダムシの寄生が抑えられる可能性があると考えられる結果が得られました（図1上）。また、魚の体表粘液には体を守る働きがあることから、体表粘液量と相関関係のあるタンパク質量を調べた結果、ハダムシの寄生が少なかった青梅ジュース区では感染試験前（図1中）と後（図1下）でタンパク質量に変化はみられませんでした。

今後は、青梅ジュースを与える期間をさらに延ばすことで、ハダムシの予防効果を高められないかと考え、検討する予定です。

（渡 智美）

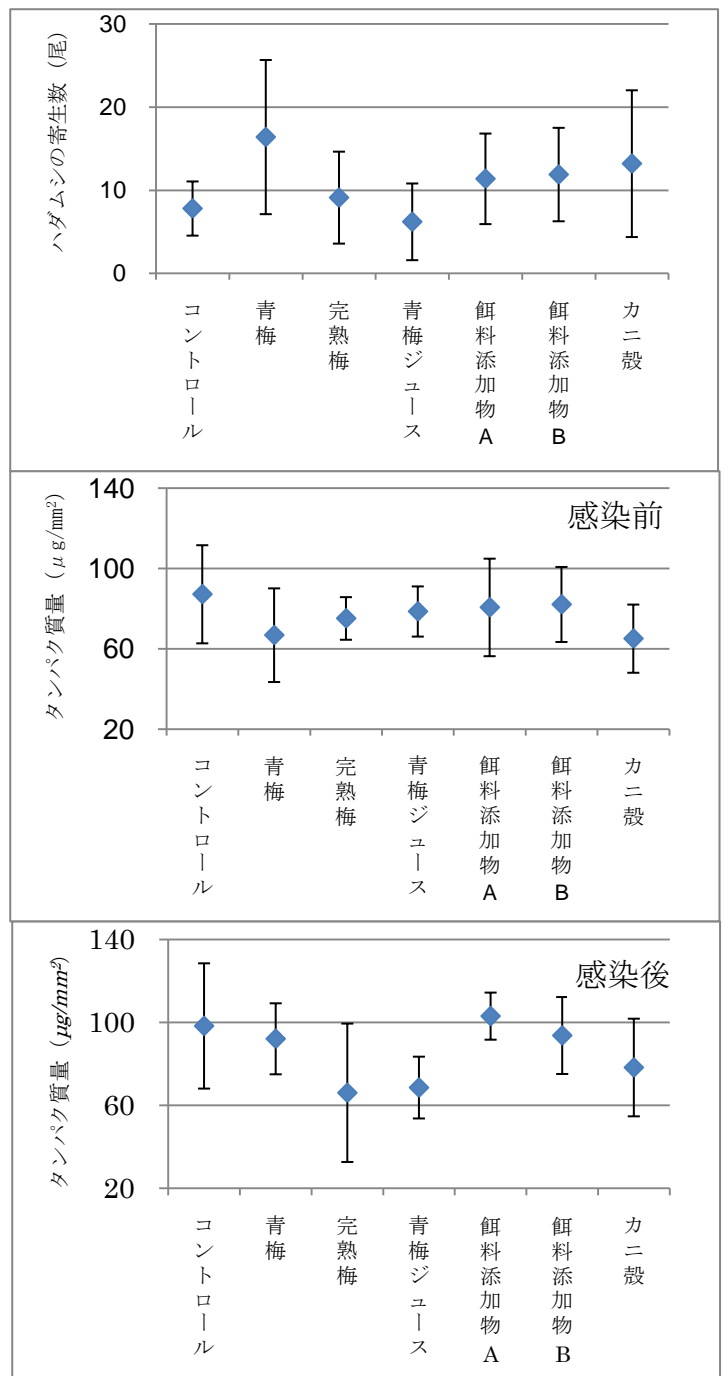


図1 ハダムシの感染数(上)、感染前の体表粘液中のタンパク質量(中)、および感染後のタンパク質量(下)

平成22年度スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海側の各試験研究機関によるスルメイカ漁場一斉調査が、6月下旬から7月上旬にかけて行われましたので、その結果についてお知らせします。

(1) 福井県の調査結果

福井県沖合の4定点において、釣り機5～6台を用いて每晚8時間ずつ釣獲試験を行いました。

- 漁場水温…釣獲海域の表面水温は23.5～25.3℃（2009年；19.8～21.0℃）、50m深水温は11.4～14.7℃（同；15.5～17.2℃）でした。
- 釣獲結果…総釣獲尾数は、3,122尾（2009年；1,680尾）、CPUE(釣り機1台1時間あたりの釣獲尾数)は6.4～15.9尾、平均12.8尾でした。
- 体長組成…釣獲されたイカの胴長（外套背長）は調査定点で様々ですが16～18cmの個体が主体でした。

月日	7月5日	7月6日	7月7日	7月8日
調査位置	N 36° 01' E 134° 07'	N 38° 02' E 135° 01'	N 37° 38' E 135° 39'	N 37° 00' E 135° 59'
釣獲尾数	728	554	255	1585
CPUE	15.2	13.9	6.4	15.9
平均胴長 (cm)	17.2	21	18.3	16.9
表面水温 (°C)	23.8	23.5	25.3	23.7
50m深水温 (°C)	11.3	14.7	12.8	14.4
標識放流数 (尾)	434	—	—	1040
標識放流数 (尾)	JPA32・33・36		JPA34・35・39	
(黄色アンカー型タグ)	JPA37・38		JPE32・33・34・35 JPE36・37・38・39	

2) 日本海全体の状況

日本海区水産研究所の取りまとめによると、全調査定点におけるCPUEの平均は14.59尾で、昨年(18.24尾)の80%、近年平均(16.50尾)の88%の水準でした。秋田県～石川県沖(北部日本海)では能登半島付近で分布密度が高くなっていましたが、福井県～長崎県(西部日本海)では高くありませんでした。沖合域では大和堆付近で分布密度が高い調査定点が複数みられ、昨年よりも大型個体の比率が高くなっていました。

5月の西部日本海の漁獲量は昨年を下回り、6月は昨年並みで、5、6月ともに近年平均を下回りました。

今後の水揚げ量の見通しは、西部日本海は10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となるようです。11月以降は太平洋側からの来遊群が昨年よりも減少するとみられ、漁獲量は昨年を下回るでしょう。沖合域では8月下旬以降の大和堆周辺海域において昨年で近年平均を下回るでしょう。本州北部日本海においては、活発な漁場が形成されることはないようです。本調査では、各機関により標識放流が行われました。標識の付いたスルメイカが採捕されましたら、水産試験場までお手数ですがご連絡ください。

(高垣 守、鮎川 航太)

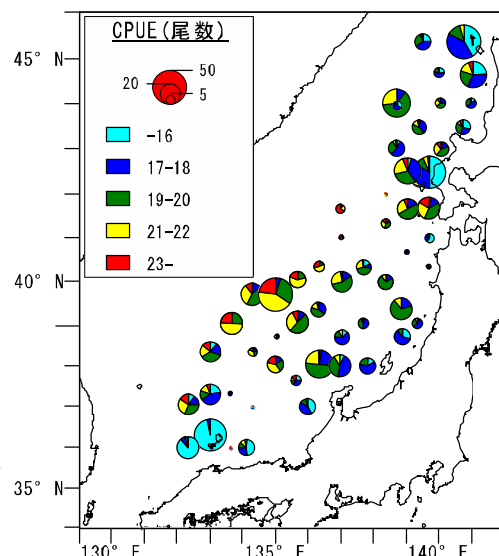


図1. 日本海におけるスルメイカの分布状況